

1. 令和4年度 外国語(英語)及び外国語活動について

本校では、教育課程特例校制度と活用し、「未来に夢を持ち、たくましく生き抜く、活力ある子ども」～英語で世界とつながりを持つようとする子どもの育成～という目標のもと、1～4年生では、週1時間の外国語活動、5.6年では週2時間の教科英語を実施してきた。とりわけ、1.2年生の外国語活動においては、島本町教育研究会の英語・外国語活動部会で作成している「小学校外国語・外国語活動年間指導計画」を参考に実践を行った。

指導にあたっては、担任とALT、中学校専科加配教員とで、定期的に打合せ会議を行い、単元の流れ、1時間ごとの内容について協議を行ってきた。授業では、主に担任が主導で進めた。

2. 児童による評価結果と考察

児童アンケート	割合				
質問項目	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	回答割合合計
(1)外国語活動や英語の勉強は好きだ。	35%	42%	16%	7%	100%
(2)外国語活動や英語の授業では、発言や手を挙げるなど、積極的に参加している。	51%	30%	13%	6%	100%
(3)外国語活動や英語の授業中にわからない事があった時、先生や友だちにたずねて、わかろうとしている。	48%	40%	9%	3%	100%
(4)外国語活動や英語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に、役に立つと思う。	63%	27%	8%	2%	100%

・学習に対する意欲が高く、理解に対して積極的な姿勢で取り組んでいる。

→「外国語活動や英語の勉強は好きだ」の肯定的回答は77%、「外国語活動や英語の授業では、発言や手を挙げるなど、積極的に参加している」の肯定的回答は81%と高く、意欲的に学習していることがわかる。授業中に複数の教員で指導を行っていることで、一人ひとりの理解度をより細やかに確認しながら、授業を進めてきたことが高い肯定的回答につながっていると考える。また、安心して発言・質問できる学習環境構築の成果として、「外国語活動や英語の授業中にわからない事があった時、先生や友だちにたずねて、わかろうとしている」の肯定的回答が88%と非常に高いことも、上記と関係が大きいと考える。

・英語についての重要性を認識している児童が多い。

→「外国語活動や英語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思う」と考えている児童が90%と高い肯定的回答を示している。今後、コミュニケーションの手段として、学習している内容が幅広く活用していけることや、実生活の様々な場面で活かしていけることを児童自身が理解・認識した上で、高い意識をもち、学習に取り組んでいることがうかがえる結果になっている。

3. 教員による評価結果と考察

教員アンケート		割合			
質問項目	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	あてはまらない	回答割合合計
(1) 外国語活動について、おおよそのイメージはつかめている。	25%	65%	10%	0%	100%
(2) 外国語活動について、児童と一緒に楽しんでいる。	40%	45%	10%	5%	100%
(3) 外国語活動について、T1として主体的に授業を行うことができている。	20%	60%	15%	5%	100%
(4) 英語が苦手である。	20%	50%	25%	5%	100%
(5) 幼稚園から中学校3年生まで配置している外国人指導助手(ALT)と協働し、児童の英語コミュニケーションを図る基礎となる能力の育成ができている。	25%	70%	0%	5%	100%

・教員全体に外国語、外国語活動の授業への主体的に取り組む姿が見られる。

→「外国語活動について、おおよそのイメージはつかめている」という肯定的回答が90%となっている。これは、英語担当教員を中心に、担任とALT、中学校専科加配教員との密な打ち合わせを実施した上で授業に取り組んでいることが大きく関係していると考えられる。

また、「外国語活動について、児童と一緒に楽しんでいる」という質問項目に関しても、肯定的回答が85%となっており、教員自身が楽しみながら授業に取り組んでいることが、児童の積極的な学習参加につながっていると考ええる。

「外国語活動について、T1として主体的に授業を行うことができている」と肯定的な回答をした職員は80%であり、定期的なALT・専科加配教員との打ち合わせを行い、単元ごとのめあての確認や、様々なアクティビティについて共通理解を図った上で指導にあたれているという積み重ねの結果と考えられる。

・定期的な校内研修の実施と校内組織での連携した取り組みの推進。

→「英語が苦手である」の回答が70%とやや高めになっており、上記2つの肯定的回答とは相反する結果となっている。授業については主体的に実施できるが、教員の英語に対する苦手意識は、まだまだ残っていると考えられる。今後も、教員の英語に対する苦手意識を克服できるように、定期的な校内研修と校内組織での連携した教材研究等を実施していく必要がある。

4. 学校協議会による評価と考察

- ・教員と児童が英語でコミュニケーションをとる場面が多く見られ、児童もそれを理解した上で学習に取り組んでいた。
- ・児童が積極的に挙手をして発表する姿が見られ、答えを間違えても、「ナイス TRY」とフォローの声掛けをすることで、安心して発言できる学習環境が整備されていると感じた。
- ・一人ひとりの児童に対して、担任が個別指導をしながら授業を進めているので、学習を進めやすいと感じた。
- ・児童がタブレットを活用して学習をしたり、教員もデジタル教材・プロジェクト等を活用したりしながら学習を進めているので、児童も興味関心を持ち、前向きに学習に取り組んでいる様子だった。